

2021年1月31日(日)

老球の細道590号

1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1月は生まれた時から新しい年の始まりであり、私の誕生日の月でもある。「毎日がお正月、毎日が誕生日」をモットーにしても、本物のお正月、誕生日は何かと新鮮さ満載、やる気満々となる。今年は「進年明けましておめでとうございます」で、コロナ禍で停滞するのではなく、何でもいから今までより少し進化、進歩した丑年になることを祈願した。

1・読書から

◆「どうせやるなら一番純粋で高級なことをやりましょうよ」〈井上靖『城塞』河出書房〉:

棺桶に入る前に、日本文学、世界文学の名作と言われているものを少しでも多く読み終えたいと思っている。時間の洗礼を受けて残っている作品は今でも生きる指針を与えてくれる。爺様のくせに青臭いが、ちっぽけなことに満足しないで超一流を目指したい。

◆「今がその時でなければ、永久にその時はこないだろう」〈『人類の知的遺産・サルトル』

講談社〉:昔の知人に会って別れ際にかわす言葉の決まり文句「そのうちに一杯やろう」。義父はよく言っていた。「お化けと“そのうち”にはいまだかつてあったことはない」と。

◆「なるべく早く親の手を離すのではなく、なるべく手をかけるのが子育て」〈『文藝春秋

2021年の論点』文藝春秋社〉:子ども4人全員東大の医学部に入学させたスーパー子育て母親の言葉である。何も変わったことはしていない。要は基本の「読み書き計算」。注意すべきは周りの変化から、子どもをより一層意識して守るべきだという。自立の意味を再考。

2・新聞から

◆「自分の機嫌は自分で取って、人に取ってもらおうとしない」〈朝日:経済気象台〉:年賀状の決まり文句「穏やかな年になりますよう」。コロナ禍で大会がことごとく中止になりいらつく昨今、お笑い芸人みやぞんの言葉が心に響く。孫が見ている「天才テレビ君」のみやぞんも終始笑顔で役を演じきっている。仕事をする時は常に上機嫌でやる。

◆「私の求める最高のブドウは、困難な土地でないととれない」〈朝日:ひと:マーサ・ナカムラ〉:最年少で萩原朔太郎賞を受賞したナカムラさんがフランスのワイン職人のこの言葉に奮い立って、詩人と会社員という「あえて困難な道」を選択した。困難は試練の恵み。吹け吹け嵐、枝は折れよと根は折れぬ。

◆「光は常にある。それを見つめるだけの勇気さえあれば」〈朝日:米国詩人:アマンダ・ゴーマン〉:20日にあったバイデン大統領の就任式で朗読された詩の最後の部分である。バスケットにおいては、選手集めたもの勝ちの風潮の中で、育てたもの価値に光を見出す。

◆「薄暗いレコード屋で何時間も飽くことなく時間を過ごせる人、それを人生の何よりも面白いと思える人たちによって音楽は支えられている。学問も同じ」〈朝日:折々のことば:若林恵〉:バスケットも同じである。一日中体育館に居候してシュートに明け暮れても飽きない子どもたちがいる。昔も今も最後は楽しんでる者にはかなわない。